

# 議員活動報告

## 社会文教常任委員会所管事務調査 平成27年10月28日～29日

社会文教常任委員会5名と議長及び事務局1名の7名で所管事務調査にあたりました。今回の行先とテーマは神奈川県横浜市「24時間体制の介護支援」と東京都荒川区「子どもの貧困・社会排除問題から子どもを守るために」であります。

■1日目10月28日 1日目の横浜市は昭和59年に活動を開始した「秀峰会」という社会福祉法人です。横浜市内で関連する施設33ヶ所と大規模に事業展開しています。その中でも今回の視察先は、27年4月に開所した小規模多機能型居宅介護施設の「ひめゆり」の見学と施設概要や受入れ状況等の説明をして頂きました。なぜ小規模多機能型居宅介護施設が必要なのか。人間の「死」というものを根底から捉え直すために「デス・エデュケーション」という考え方を大切にしている事。この施設の4つの特長は①可能な限り在宅で暮らす事を支える、②自宅に24時間365日の安心を届ける、③通い、宿泊、訪問を使い柔軟に支える、④地域のみみんなで考える、以上を念頭において運営されているとの事です。事業展開そのものが、小規模ならではのサービスや、住宅密集地だから出来る事、また横浜市からの補助金3000万円なども運営面において手厚い公的支援がプラスの要因だと思いました。



「ひめゆり」で説明を受ける

■2日目10月29日 2日目は東京都荒川区の取組みを研修しました。議長室にて荒川区教育長と担当官から説明を受けました。今、社会問題の一つにあげられる「子ども達をどのように守るか」に対する研修です。荒川区では、その現状から荒川区独自の「あらかわシステム」をつくり基本姿勢とその取組みにより効果が上がっている経緯や研究プロジェクトの内容についてお話し頂きました。取組み内容ですが委員会の設置、次いでシンクタンクの設定。調査結果をもとに貧困の内容を分析、経済的、非経済的、複合的と様相要因のリスクや決定因子を割り出し「あらかわシステム」を構築したそうでありました。スペシャリストの育成、産後のメンタルサポート、食事をとれない子ども達への食事の提供などそれらの問題に対し成果を上げているとの事でした。

2日間の研修を通じて感じた事は、都会でも高齢者や子どもをサポートする取組みがなされている事に対して人間的な温かさがあると思ひ、当町においても今後増加する高齢者に対する介護支援や次世代を担う子ども達に対するサポート等子育て支援の充実について官民一体となって協力し取組むべきところと思ひました。（文責 矢島 尚）

## 民生児童委員との懇談会 平成27年10月21日

富士見町議会は10月21日、民生児童委員協議会（和田茂会長）との意見交換会を町役場で開きました。町民に開かれた議会を目指す取り組みです。交流を通じて協議会への理解を深め、議会活動にも生かしていこうと、議会改革実行委員会（名取武一委員長）が主催。全議員11人と協議会委員約20人が出席しました。

最初に和田会長が委員43人の主な活動を説明。要援護者、独り暮らし高齢者、高齢者世帯などの見守りが活動の大半を占め、委員の負担は従前に比べて増していると語りました。「来期以降の負担軽減のための提言をまとめ、町に要望書を提出する予定」と述べました。

意見交換では、議員から「定数を増やすことはできないか」「活動をサポートする制度はないか」「町社協、地区社協との関係は」などを質問。委員からは「かつてのようなご近所同士の見守りが増えてほしい」「福祉推進委員300人が見守りを支援している市もあり、参考にしたい」「高齢者サロンを充実させたい」などの考えが示されました。サロンについて和田会長は「空き家を町が借り上げてくれれば」と希望しました。



意見交換する町議と民生児童委員(左側)

「赤ちゃん訪問とファーストブック贈呈」の取り組みについては、「本を届けるとお母さんと話ができる。訪問回数が急に増えた地区もある」とし、手応えを語りました。議会は意見交換を通じて、超高齢化が進む中で委員の負担が増大していることや、母子家庭が増えている現状を知る機会になりました。加々見保樹議長は閉会のあいさつで「必要と思われることは行政に働き掛けていきたい」と応えました。

（文責 川合弘人）